

米岡 2 号古墳(裝飾古墳) 調査概報

1968, 10,

郡家町教育委員会

米岡2号古墳(装飾古墳)調査概報

1 調査の目的

郡家町教育委員会は昭和43年刊行を目的に数年前より郡家町誌編集を実行にりつし、その内の古代編をまとめるにあたり遺跡の分布調査を継続してきたが、同年7月下旬の分布調査の際に当古墳が近年盗掘されたことを知り、更に盗掘破かいされる懸念もあるので、^と発掘部の調査と測量を行なうことになつたものである。装飾古墳を^と判明したのはこの時の分布調査によつてであつた。

2 調査遺跡名及び所在地

米岡2号古墳 横穴式石室内に線刻による壁画を有する古墳

八頭郡郡家町米岡、中ノ谷201番地、松苗植林地、片山部密 谷口富治氏所有地

3 調査主体者

郡家町教育委員会

4 調査者

亀井 照人 (県立科学博物館学芸員)

山本 虎之助 (郡家町教育委員会主事)

田中 秀明 (鳥取大学教育学部学生)

道家 宣子 (同)

県立八頭高等学校郷土研究部

5 遺跡地概要

壘石山南ろく標高約100mあたりの線上に造営されている。郡家町米岡地内にあり、その下は梨園であり現場は松苗植林地である。国鉄因美線かわはら駅から道を北にとつて徒歩約30分で山ろくにいたる。眼下に東から西に流れる八東川と流域にひろがる美田がひらけ、その南には八頭の山脈がせまってくる。

この八東川流域は古代八上郡の栄えた地であり、東に、白鳳期の古寺・土師百井廃寺もみられ、古墳時代後期から奈良期にかけての遺跡の豊富な地であり、当古墳近辺にも教基の古墳が知られている。

6 遺跡の保存状況

7 前述のごとく盗掘により開口され、~~玄室部は完全に壁土が除去され遺物はほとんど失われていた。~~

封土は大半が流失し、天井石及び羨道側石を露出させているが、墳丘西側及び南側に墳丘築成の際の保土による巾約3mの凹帯^{がみちみち}（これはそのまま古墳を半周する周濠となつたものであろう。）石室は羨道部の天井石1枚を欠いているが、崩れも少なくかなり良好なものである。（第1図参照）

8 調査経過

9月1日 —— 古墳周辺測量、羨道部埋土除去作業

9月2日 —— 遺物検出、遺構及び遺物出土状況撮影、壁面拓本とり、石室実測

9 遺構及び遺物出土状況

南南東に目を開いている。全長5.10m、玄室長2.2m、同室奥巾1.4m、羨道前巾1.6m、玄室中央高1.8mの規模は通例のものである。玄室（埋葬室）と羨道（埋葬室につづく通路）の境を、一枚岩を60cm余、縦にせり出して区別しているだけだから羨道の巾も玄室の巾とかわりがない。

石室は、近辺から得られる巨大扁平な転石を立積みで構築し、玄室奥壁の高さを基準にして天井石を架構したために前面の不足部分を割り石で充填する格好となつている。ふた石は玄室部で3枚、羨道部で2枚（1枚は玄室部にもかかっている）と計5枚で形成されている。玄室のふた石が中高にしてあるのは因幡東部に共通した手法である。

床面は、玄室では西側でかたよせて石室にほぼいつばいに横たわる巾110cm、長さ200cmの板状石を敷き余部には小石片をつめている。（東側は盗掘の際除去されたものとみえ敷石より下部まで掘り下げられていた。）羨道部にも中央あたり、東壁に接して巾80cm、長さ100cmの板状石が敷石として使用された状態で発見された。（このことは須磨器・壺がこの上部で検出されたことで推察がつく）。しかし、このような小さな板石をこゝだけ敷石に使用したのかその意図は不明である。羨門部には、小石塊が数塊みられるが、閉塞に使用されたものか、側壁構築の材量として使用されたものの一部の転石かはつきりらかにし得なかつた。なお、羨門前庭については未調整に終つてしまつた。

遺物は、玄室内にあつては、除去された土中に混入していた土師器片若干と、西壁と羨道境界

石間のコーナー部に須恵器坏1を検出し、羨道部では西壁コーナーから中ほどにかけて須恵器・高坏2、ふた4、坏2、土師器・坏2、刀子片1が点在して検出され、東壁中程から奥に沿って壺2、坏1が検出された。（第4図参照）

10. 壁 画

線刻による図文ともいべきものが玄室内の側壁、ふた石にみられる。後世の落書きが上をおいた部分もあり、変風化によつてなどして追刻の困難なところもあるが全体的に保存良好なものである。

線刻は下部の立積み側の側壁には少なく、石室内に立つて丁度目のとどく面に多くえがかれてそれは東西側壁、天井石側面と石室全面にわたる。特に西側壁の一面には前面のみならず、その石の上面奥部にも線刻されていて石室構築の途路にもなされたことであろうとかがわせる異変ある事象もみられる。憶測をたくましくすれば石室構築の際の一種の呪術行為としてうけとらえるのである。

線刻図文の内容は、多まぐりとしか表現しえない乱雑な線の交錯と、一種の稜形文、木ノ葉文などがその主なものである。他に右壁奥の壁面に人物像と思われるもの、羨道寄りの西壁の一群の線刻などは、いわゆる幾角学的図文と質をこことにする面の強いものであるが明確にしえない。

11. 出土遺物

須恵器坏5、ふた4、高坏2、壺2、土師器・坏2、刀子片1、土師器片若干がみられる。

(1) 須恵器・坏（第3図、9～13）

古式の坏のつと高台を付した、いわゆる茶わん形の坏（10～13）の二種がみられる。

（11）も底部を欠失してはいるが（13）と同型の坏と考えられるものである。（10）はこれらの内ではやや大型であるが総じて小型化しており、焼成度も均一的で堅ろりさに富み、共に器壁もりすく仕上げられ、かつての坏と全く異つたものとなつている。古墳時代終末期にあつて生産技術面あるいは政治的にも特記すべき変動進行のあとがうかがえるものである。

(2) 同・高坏（同 7、8）

2個出土しているが、両者は同型同規模でその焼きも又共に軟弱で一種の土師質をひいたものである。坏部はマリ状にひらき、脚部には何等の装飾をもたないもので、一方ではスカンかざりをとるものもあるが退化現象ないしは大量生産からくる簡素化現象（両者は共通するものであろう）を単にあらわした、いわば通例の高坏と言えよう。

(3) 同・ふた（同、3～5）

宝珠形つまみと、身受けの内縁をそなえた大きさもほぼ同じで堅ろうな焼成のものである。身受け部の内縁の張り出しの内・外の別はあるが、いずれも坏のふたと考えられる。

(4) 同・壺（同、1、2）

(1)は高台にのる長けい壺、(2)は一見したところ長けい壺ともみられるが、やゝ中心よりはずれたけい部、一方に装飾用ボタンのはりつけから平瓶と区別される。

長けい壺はりようこそなないが強く肩を張り出したもので、口唇部のそり返り、へノ字状にひらく高台など、この期の特徴を示す。けい部には6本の凹帯をめぐらせ、中ほどをスムーズにふくらませ壺全体にやわらかみをもたせている。高台にみられるへらによるスカン飾りは三方につくられている。堅ろうな焼きで、口縁内面及びけい部外面にうすい自然ゆりがみられる。

平瓶は、口縁部をやゝ直口ないし内湾気味にのぼし、けい部に2本の凹帯を付した、体部に比して大きな口部をなすもので、前例のよりに長けい壺に似て平瓶の要素のうすい平瓶である。底部が平底にされているがこの器体を特徴づけている。

(5) 土師器・坏（同、14）

口縁部をやゝ外反させた身の浅い坏で器壁のうすいことが目立つ。黄土色を呈し、質はもろく表面はかなり磨めつしていた。測図にみられない同種坏も又同じ形状のもので完全に軟弱化して完全な形でとりあげ得なかつたが、赤色を呈するものであつた。

(6) 刀子片（同、15）

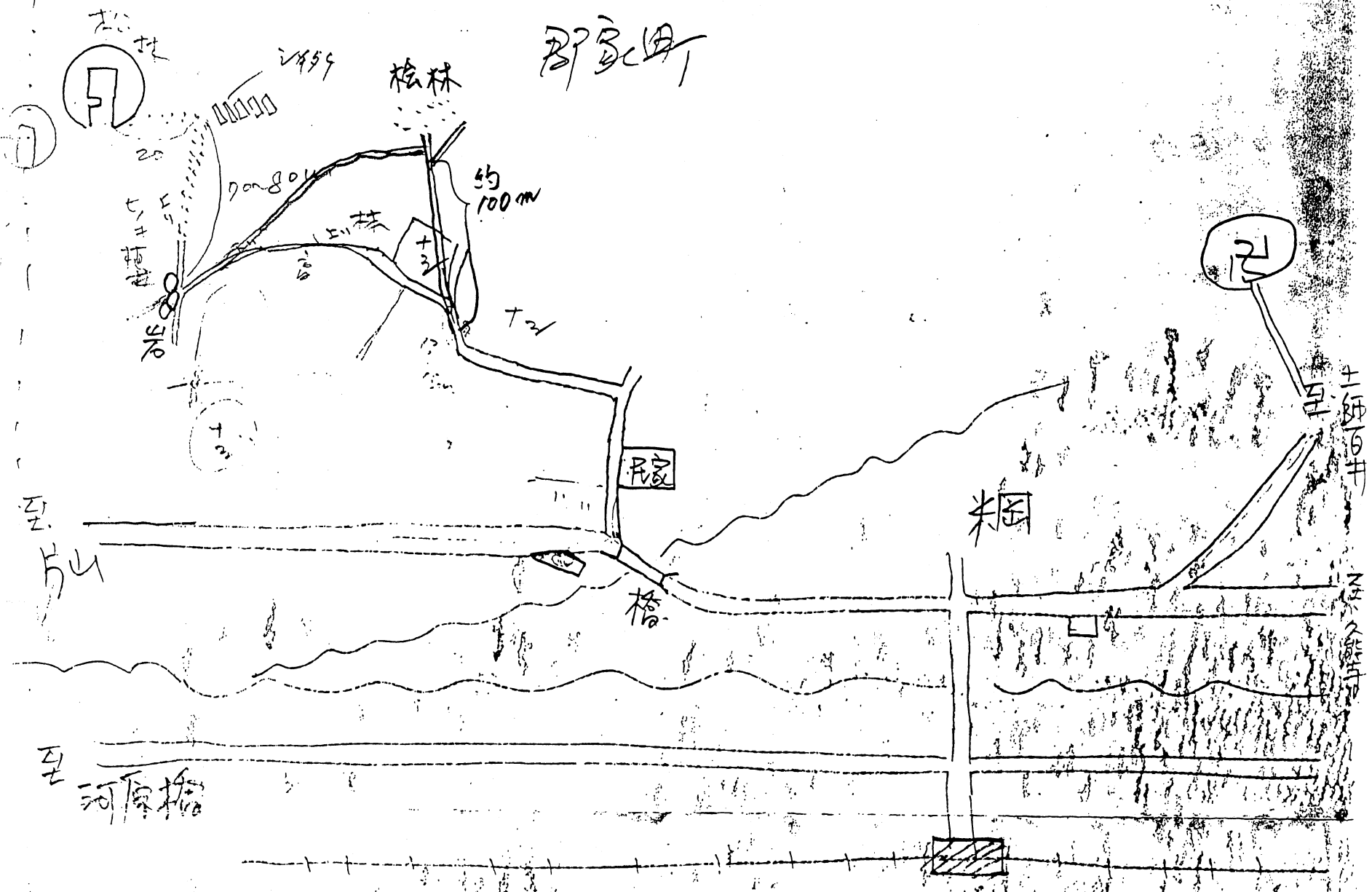
刀子の木柄さし込み部（にぎりの部分）と考えられるものであるが、かなり腐食が進んでいて詳細な観察が出来ない。

12 結

いわゆる装飾古墳の一つとして特筆さるべき米岡8号古墳は、現代の感覚からすれば、魚・馬・人物等の具体的な線刻画を有する県内にみられる他の装飾古墳に比してはなやかさはないが、この期にあつては特異とさえ言える埋葬習俗の分布圏の拡大を明示するものであり、貴重な遺跡と言わねばなるまい。

鳥取県では現在まで、この種の装飾を有する古墳の確実なものとして鳥取市久末・空山に5基、国府町宇部野山に3基が発見されている。この古墳を含めて都合8箇所9基となるわけだが、これらがそこに線刻された図文(手法もであるが、綾杉文、木ノ葉文に共通点を見ることが出来る)によつて三者がまとめられるし、造営時期もその出土品によつて古墳時代終末期に共におくことが出来るのである。

これらは宇部野山山ろく、霊石山、空山山ろくに営まれているが、先に発見されたものが数基にわたつて群在しているところからも霊石山南側山ろくにおいて、更にはその周辺において同種の古墳の発見される可能性は強い。ちなみに池田地内の古墳群の一基に線刻文らしきものもみられている。精査によつて今後この種のもが増大すると考えられる。只、ゆずらしいと言ひのでなくこの調査の進行によつて同文化の内容が具体的につかめ、更には当時の政治的つながりをさえも明確にしうる一つの糸口ともなりうるものである。



郡家田

松林

田舎

橋

田

河原橋

河原歌

米田子号地

